

紙のピアノ

谷 たか子

薫の家の応接間には立派な革張りのソファがあり、ふかふかの絨毯と壁に掛かった洋画。その下にはアップライトピアノが据えられていた。

佐恵子が自分の家が貧乏だと気付いたのは、小学校四年生になって薫と仲良くなり、彼女の家に入りやすくなったからだった。

薫の父親は某有名画材メーカーの重役であり、地元の名士であった。

佐恵子の家は父親のいない母子家庭、母と弟の三人が六畳一間の古アパートに住んでいた。共同炊事、共同トイレは戦後十数年の大阪では珍しくもない時代であった。

薫は佐恵子を姉のように慕い、妹のいない佐恵子は何かにつけて薫の面倒をよく見た。

二人がよく薫の家で宿題をするようになると、薫の成績が右肩上がりに良くなったので、薫の母親は佐恵子に好意的であった。

そんなある日、薫の母親が佐恵子に真顔で頼み込んだ。

佐恵子ちゃんお願いがあるの、薫がピアノのお稽古を嫌がってね、困っているの。佐恵子ちゃんと一緒になら、薫もちゃんとお稽古してくれるかな、と思ってるね…お稽古の時、傍に付いてやってくれないかなあ?」

その時佐恵子の脳裏に浮かんだのは、美味しそうなケーキと紅茶。おばさんはきこつ用意してくれるに違いない。佐恵子は二つ返事でOKし、毎週木曜日の学校帰りに薫の家へ寄ることにした。

ピアノの先生はふっくらとした中年女性。子供好きそうな優しい人だった。

薫は佐恵子が傍にいと、嫌がらずピアノに向かった。まずは指

慣らしから十分間。

「じゃあこの間の曲を弾いてみましょうね。練習しましたか?」そう言われて薫が弾きだした曲を聞いた時、佐恵子は思わず椅子から立ち上がった。

虹のあなたに「…この間学校の映画会を見た オズの魔法使い」の歌。佐恵子の大好きな曲だった。鍵盤の上を薫の小さな手がぽつぽつと動くと、聞き覚えのあるメロディが流れてくる、佐恵子は目と耳に全神経を集めて聴いた。

家に帰っても、佐恵子の耳の興奮は収まらなかった。

「ねえ、お母ちゃん、ピアノ買ってー!」

母はびくつきして啞然としている。

「ピアノなんて、こんな狭い部屋の何処に置くんや、廊下で寝るんか? ええ加減にしい。金持ちの子とばかり遊ぶから、とんでもないこと言っんやーもうあんな子と遊ばんときー!」

驚きが怒りに変わったのか、母の怒りの矛先が薫に向く。遊ぶなと言われて、佐恵子も腹が立ってきた。あんなに良くしてもらっているのに…。

その晩、気まずい夕食を済ませると、佐恵子はさっさと布団に入ったが、眠れる訳がない。ピアノが買える家ではない事はよく分かっていた。母は昼間働いた上に、夜も内職をしていた。佐恵子もよく内職の手伝いをした。分かっているが、薫と遊ぶと言われた事に、悔し涙が出てくる。

泣きながら何時しか佐恵子は眠っていた。

翌朝佐恵子が目を覚ますと、枕元に何やらカレンダーの紙を折ったものが置いてある。開いてみると、裏の白い面にピアノの鍵盤がマジックで描かれてある。

「お母ちゃん、これ…?」

ぞつや、立派なもんやろ？ゆづべ、あんたが寝てから下の階の、売れん作曲家のおっちゃんに、本見せてもろて作ったんや。最新型の折り畳み式やでー」

お母ちゃん…ありがとう…」

佐恵子は紙のピアノを胸に抱くとぼろぼろと涙を流した。

さあ、さっさと用意して学校へ行きなさい、遅くなるよ」

心なしか母の目も赤かった。

次の木曜日から佐恵子は真剣になった。薫のお稽古を見て、聴いて、覚えて帰り、紙のピアノで練習をした。勿論音が出るはずは無かったが、佐恵子の耳には聞こえるのだ。

薫の方も、佐恵子が傍で、一生懸命見るものだから、真面目に練習するようになり、ピアノの先生もびっくりするほどの上達ぶりだった。薫の母親は、自分の作戦が功を奏した事の上機嫌で、いつも美味しいおやつを用意してくれた。

佐恵子はどうしてもピアノが弾きたくなって、放課後教室のオルガンを弾いてみた。楽譜が無くても佐恵子には弾けたのだ。

誰かが言いつけたのか、すぐに先生がやって来た。先生は佐恵子が弾き終わるのを待って、大きな拍手をしてくれた。

すごいー夏井さんすごいー先生よりずっと上手だわあ

思いがけない拍手に佐恵子は真っ赤になってうつつむいた。

佐恵子の家庭をよく知る先生は、「瞬にして事情を呑み込んだ。

オルガンが好きなのね。誰もいない教室で弾かせてあげる訳にはいかないから、先生がこの教室でテストの丸付けをする時に弾



きなさい。あなた、絶対才能があるわよー」

思いがけなくオルガンを弾かせて貰える事になったのだ。担任の先生は週に二回は弾かせてくれた。

次の木曜日、ピアノのお稽古が終わり、先生が母親と出ていくと、薫が楽譜を見ながらため息をついた。

「こが何回やってもうまく弾けないの」

「ちょっと弾いてもいい？出来るかなあ」

佐恵子は恐る恐るピアノを弾きだした。

すごいー佐恵子ちゃん弾けるんだー」

薫がびっくりして目を丸くしている。

いつの間にか先生も傍で聴いていた。

あなた、見ているだけで覚えたの？絶対音感があるのね」

先生は感心して何か考え込んでいたが、こう言った。

ピアノが好きだったら先生の所に来ない？先生はね、色々忙しくて大変なの。丁度楽譜を写してくれる人を探しているの。お手伝いをしてくれたらピアノを教えてあげるわよ、どう？」

願ってもない事だった。つぎの日から毎週一回、佐恵子は、隣町の先生の家に通い続けた。

三年後、市営住宅に当選した佐恵子の家族は引っ越す事になり、ピアノのお稽古は中断を余儀なくされた。

中学になって、薫は私学のお嬢様学校に通う事になり、こちらも自然と疎遠になってしまった。

公立高校を卒業すると、佐恵子は大手の楽器店に就職した。弟の進学を考えると、音大への進学など夢のまた夢であった。ただ、ピアノと離れたくはなかったのだ。

楽器店には数台のピアノがあり、定期的に調律師が来店した。演

③ 奏者を陰で支える地味な仕事だが、手に職をつけることが出来る。

佐恵子の母は何かと言つて

女も自立せなあかんよ。ちゃんとした資格を持ちなさいよ」と口癖のように言っていた。

森田さん！」

佐恵子は、既に顔なじみになっていた調律師に思い切つて聞いてみた。

私、調律師になりたいんです。弟子にしてくれませんか？」

森田氏は突然の申し出に驚いた様子だったが、佐恵子をじつと見てこう言った。

なりただけでなれる仕事じゃないよ。感性が大事だからね」

わかってます」

ちよこここれを弾いてくらん」

そう言うと彼はピアノのふたを開け、即興のメロディを二小節弾いた。

はい」

佐恵子は一度聴いただけのメロディを再現した。

絶対音感か…大したもんだ…」

森田氏はしばらく考えてから口を開いた。

僕の師匠を紹介するよ。その方が君の才能を伸ばせると思うよ。内弟子は大変だぞ、辛抱できるか？」

大丈夫です。有難うございます。石にかじりついても頑張ります！」

現代のように調律師の養成所などは無かった時代。職人は、徒弟制度によって師匠の技術を受け継ぐよりなかった。

それから三年、佐恵子は、調律師の第一人者、橋本雄一郎の弟子として、楽器店のピアノばかりでなく、コンサート会場のグランド

ピアノの調律まで任されるようになった。

しかし、今日はいつもの調律とは違う。シヨパン国際コンスクールの日本代表の選考会なのだ。調律師の僅かなミスがピアノリストの夢を打ち砕く事もある。今日はやはり師匠の橋本氏がつきっきりで目を光らせている。息詰まるような緊張の中、調律を終えた佐恵子は初めてその日のプログラムに目を通した。

中七番 守口薫…えっ、もしかして…あの薫ちゃん？」

佐恵子は出演者の控室に飛んで行った。

五人ほどのドレス姿の女性がいた。壁際につつまいて目を閉じている水色のドレスの後ろ姿に見覚えがあった。

守口さん？薫ちゃんなの？」

佐恵子が覗き込むと、舞台用の派手なメイクをしてはいるが、懐かしい顔が振り向いた。

佐恵ちゃん？…えっ、何でここへ？」

薫は緊張して震えていたのだった。

薫ちゃん、今日貴女が弾くピアノは、私が調律したのよ。ピアノが貴女を守ってくれるからね、大丈夫、安心して弾くのよ」

どんなに時を隔てようと、会えばやはり姉の様な口の利き方をしてしまう。薫はうるんだ目でこっくりと頷いた。

じゃあ、私は客席で聴かせて貰いますから」

佐恵子はそう言って薫の手を握り、部屋を出た。

薫はシヨパンのスケルツォ第三番嬰八短調作品三十九を見事に演奏した。

佐恵子の胸に熱いものがこみ上げてくる。

一緒にピアノの稽古をしたころの事が次々と思い出された。

母親の手作りの紙のピアノで練習した日々が懐かしく甦る。あのお陰で今日の自分があるのかも知れない。母に感謝しなければ…。

④

調律師は縁の下の力持ち。どんなに上手く調律しても拍手を賣う事はない。それで良いのだ。

精度の高い楽器はほとんどが熟練職人の手作りによるもので、一台一台に個性があり、全く同じ音の出るものはない。その代わり大切にメンテナンスすれば何百年と活躍する。楽器との出会いは一期一会なのだ。佐恵子は最近そう思うようになってきた。

会場の割れんばかりの拍手で、佐恵子は我に返った。その日、薫は見事二位に入賞し、予選を通過した。

(この小説は左記の歌詞を参考に作られました)

紙のピアノ』

作詞 佐野 源左衛門 文

一 黒い柱に大時計 今も変わらぬ故郷の

すすけた壁の 子供部屋

紙のピアノが ありました

開けると音が 鳴ったよ

ポトリ涙が 落ちました

ポロリポロリポロリポロリ

紙のピアノは 母の声

やさしい母の 愛の歌

二 辛い生活 母子家庭

ピアノ買ってと 駄々こねて

眠ったつぎの朝でした

二つ折りした 長い紙

マジック描きの鍵盤は

母の手作り 涙あと

ポロリポロリポロリポロリ

紙のピアノは 鳴らないが

私にだけは 聴こえてた

紙のピアノ 大阪のいびき 123 号投稿